

神武天皇
御聖蹟

山之井の由來

神武天皇御聖蹟「山之井」についての説明

郷土の誇りとして父祖相傳へ、子孫相繼いで二千六百餘年の久しきに亘り、儼然とこれを保存し來つた貴き傳説の地、我が樽井の「山之井」は今次の紀元二千六百年記念祝典を契機に、文部省から改めて「神武天皇聖蹟雄水門傳説地」として指定さるゝに至つたのであります。

尤も、指定の地域は當所をはじめ、隣接する雄信達村の一部に亘つてはゐますが樽井の丘陵を直ぐ後ろにして、滾々と湧き出づる清冽限りなき「山之井」の清泉こそ、日本書紀に所謂「茅渟山城水門」であつて、當時此の清泉は、おのづからに立派な川を形してゐたのであります。

水門とは港の謂でもあり、川水の流るゝ戸口の謂でもあるのですが、想起し奉る神武天皇御東征の際の御第一戦であります孔舎衛坂の御戦ひは、皇軍に幸せず剩へ皇兄にておはします彦五瀬命は畏れ多くも重き御矢疵を負はせられたのであります。天皇は御やむを得ず俄かに御作戦をお改めになられ海路を遠く南方へ大迂回遊ばされることゝなつたのであります、時は恰度御即位三年前の戊午の五月八日、相當に暑氣も加はつた頃の事でありますから、蓼津の濱から南へ、南へと海路を辿る皇軍にとつて、もしこの「山之井」の清泉が目にとまつたさしますならば、おそらくは舟をこぎめてそれを求め渴を醫したであらませう。

然も彦五瀬命の御矢疵は其後日一日と御痛みを増され此の水門にかゝらせ給ふ頃には御壽命のほごも危ぶまるゝまでの御重態であらせられたのであります、されば天皇は皇舟のすべてを一時此の水門に寄せさせ給ひ命の御疵の御手當を遊ばされることゝなつたのであります、命もさすがにやがて神去りまさうことを御豫感遊ばされ給ひしにや御劍をお撫でになりつゝ、慨き哉大丈夫にして賤しき虜の手傷を負ひて、報ひずして死なむや」と仰せ遊ばされたその御雄詰をながく記念申あぐる爲めに時の人が改めて雄水門と號けたのが、今に残る、傳説地雄水門なのであります。

然しながら、可惜清泉も今は全く涸れ果て、清冽甘美の味を口にし得ないのであります。

天保の頃に於ける當地の銘酒「山之井」は此の井水によつて醸造され、上戸黨をして喜ばせたものであります。

當樽井は往昔山之井ノ里とも云ひ、垂井ともいつたのであります、垂井は清水垂るゝの意から出た呼名であり、山井ノ里は山之井から出た里名であります。

「山之井」は現在の樽井の中央稍西寄りに位置し直徑二尺一寸の圓形井にして之に三尺高さ一尺八寸の石柵を設けあり。

傍に高さ一尺七寸幅五寸厚さ三寸八分の小碑あり、その正面に「山之井」左右兩面に夫木集に見ゆる藤原光俊卿の和歌及豊岡尙資の和歌を刻したり。

山の井の水門わかれて行く舟の

あかでも人にぬるゝ袖かな

右大辨 藤原光俊郷

山の井のみなごを今の樽井とは

昔忘れぬ人もこそ知れ

豊岡尙資

神武天皇聖蹟

「山之井」保存會